# ＜口腔の役割＞

## 歯仏様

江戸時代以前から、むし歯は「歯虫」が歯を食べて歯を壊していくと考えられていました。むし歯の痛みは耐え難いものです。古代の歯痛の治療は、西洋や中国においても歯虫を退治するためにむし歯の穴に乳香の樹脂をつめたり、口を開けて薬草などで燻していたといわれます。

江戸時代、明治初期には歯痛を治すには神仏に祈願、まじない、鍼灸（しんきゅう）、生薬などの民間療法、「口中医（こうちゅうい）」による口中薬の処方という方法がありました。当時は歯、口、喉、舌を治療する口中医は殿様、武将、豪商などの身分の高い人を対象としており、一般庶民には無縁の存在だったようです。そのような世相にあり、歯痛を治すには「神仏に祈願」や「まじない」に頼らざるを得なかったようです。

歯の痛みを癒すために祈願やまじないをする神社、仏閣、石造などの数は全国で約 300 か所存在すると推察されています。

桐生市新里町山上、赤城山南麓の台地に存在する国指定重要文化財、「塔婆石造三重塔（とうば　せきぞうさんじゅうとう）」、通称「山上多重塔」は平安時代初期の延暦 20 年（801 年）に僧、道輪によって建てられた供養塔です。石造は高さ 1.85 メートル、三層の塔身は一石で造られ、各層の四面に上段から右回りに安楽と平和を願う 45 文字が刻まれています。銘文の意味は「朝廷や衆生（しゅじょう）などのため、小師の道輪が法華経を安置する塔を建てた。これで、無間（むげん＝八大地獄のうちの阿鼻地獄）の苦難より救われ、安楽を得て彼岸（悟りの境地）へ行ける」と説明板に記されています。

山上多重塔はその昔、地元の人々から「歯仏様」と呼ばれていました。歯の患いに霊験があるとされ、信仰を篤くして、「歯仏様」として崇めたてられていたと言われています。

当時の人々はこの高台の地を訪れることさえ大変な苦労があったことでしょう。背景に長い裾野を広げる雄大な赤城山を望むこの「歯仏様」は、きっと歯痛に悩み苦しむ多くの人々を癒してきたに違いありません。

（参考：「山上多重塔」群馬県新里村教育委員会編集　平成 13 年 7 月 15 日発行　桐生市立新里図書館蔵）

**「山上多重塔」の覆堂**

背景には雄大な赤城山を望むことが出来ます

**「歯仏様」と呼ばれていた「山上多重塔」**

**新里地区における古代仏教文化繁栄の記念碑ともいえる「山上多重塔」**

平安初期における地方の仏教文化史上、重要な石造物として全国的にも希有なものと言われています

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】